『木箱に入ったショール』

昨年春、私は故郷函館に帰ってきた。今までも何度と無く引越しを経験しているが、その度にいつも木箱に入った立派なショールが押入れの奥から出てきて、昔のことを思い出すこととなる。研修医時代の苦い思い出である。

１９８７年初秋、循環器内科を研修中の私は、Ｈさんの主治医となった。Ｈさんは以前、心筋梗塞にかかったのだが、その後も狭心症を繰り返し、再入院したのである。８０歳という高齢であり、心臓の冠動脈という血管はかなり狭くなり、ともすれば完全につまってしまう危険な状態であったが、何とか病状も落ち着いていった。

Ｈさんは、女手一つで６人もの子供たちを育て上げたとあって、とても力強い、はきはきとした口調で、自分の思ったことを率直に話すタイプであった。あまりにも小気味のいいテンポに、看護婦をはじめとしてスタッフはやり込められることが多いようで、私も担当になったその日に、婦長から“難しい人だけど、先生、頑張って！”と言われた。しかし、なぜか、Ｈさんは私とはウマが合った。確かに言葉は多少きつく、時には頑固な一面ものぞかせ、“先生、何言ってるの！”と怒られることも多かったが、含みの無い会話は私には受け入れやすかった。

そのような中、Ｈさんの退院が決まらないうちに、私の方が３ヶ月の研修を終えて、次の科に移ることとなった。その日、Ｈさんの部屋を訪れ、お別れと激励の言葉を伝えて、部屋を出ようとした時、Ｈさんが分厚い封筒を差し出した。私は直感的に“謝礼だろうか？”と感じ、なんとか受け取るまいとするのだが、Ｈさんは例によって力強く、“何言ってるの！いいから、受け取りなさい。私の気持ちなんだから！”と子供をしかりつけるように私に告げた。私はその凄みとは裏腹に、Ｈさんの瞳の奥から感じた優しさに負けてしまい、素直に受け取り、一礼して部屋を出た。

医局に戻り、そっと封筒の中をのぞくと、想像のつかない札束が入っているのが分かった。“どうして？こんなホヤホヤの医者なんかに、こんなお金を？”と私は戸惑いを感じ、途方にくれた。あのＨさんの凄みから想像するに、きっと返そうと思っても、一喝されてしまうだろう。悩んだ末、私が考え付いたのは、そのお金で退院祝いを送るということであった。それが良かったかは別として、その時の私の苦肉の策であった。そのことで、自分自身の気持ちも楽になりたかったのだと思う。

さっそく、街に繰り出し、いくつかの店をまわった。８０歳の女性にプレゼントなどしたこともなく、あれこれ考えながらたどり着いたある和服店で、木箱に入った高価なショールを買ったわけである。しかし、物語はここで終わらない。１０日後、無事に退院したというのに、多忙を理由に私はＨさんの元にかけつけることができず、ショールを渡すことができなかったのだ。

タイミングを逸して、がっかりしていた私に、数日後、Ｈさんがまた入院したという情報が入った。“よし、今度の退院の時こそ”と改めて気を入れ直したのだが、その後、Ｈさんは再び心筋梗塞を起こし、不帰の人となってしまった。そして、私の元にはその高価なショールだけが残ったのである。

最近、医者への謝礼の問題が時々話題となる。その度、私は押し入れの奥のこのショールのことを思い出す。私は自分のポリシーとして、“医者として当然の診療をしているうえで、個人的に謝礼をもらうのはおかしい”という考えを持っている。とは言いながら、このケースのようになかなか断り切れなかったり、断ることに労力を使うのが時に面倒となってしまうことも実際ある。また品物でお礼をされてしまうと、さらに断れないというのもある。この問題に関しては、未だに自分の中でもその対応の仕方に答えが出ない。

なぜ私がこのことにここまでこだわっているのかというと、実際、謝礼をもらって当然だという医師もいるという事実である。大学病院で教授に手術をしてもらうと、いくら払わねばならない、というのも実際の話だとすれば、あまりにも醜い話である。確かに今の医療制度では医師の技術が低く評価されたり、親身に話を聞いたとしても、その姿勢が数字として評価されるわけでもない。その事は確かに問題であるのだが、それを個人のお礼としてあてにするというのはどうかと思う。患者から医療スタッフに対して、心からの感謝の気持ちを込めて、送られたというのであれば、十分に理解できる部分もあるのだが、そうされるのが当然のごとく振舞うのはどうだろうか。

押入れにしまわれたショールはＨさんとの思い出の証であり、同時に、患者にとっていつも真摯な気持ちを持った医師であるよう、私を戒めてくれるのである。

（平成 14 年 8 月 26 日　著）